

すじ雲（晴巻雲）

曲がりくねって乱れた形。乾いた感じの、すじ状の雲。低気圧に関係なく晴れ。



すじ雲（雨巻雲）

幕ではいたような形。直線的で湿っぽい。低気圧の接近を知らせる雲で明日は雨。



うろこ雲（巻積雲）

別名 いわし雲

魚のうろこのような斑点状の雲。ひつじ雲（高積雲）より高いところにできる。斑点がひつじ雲（高積雲）より小さい。雨巻雲に続いて現れることがある。明日は雨。



主虹

夕虹は東側の雨粒でできる。太陽を背に太陽と自分を結ぶ線から 42 度の方向に見える。外側が赤色で内側が紫色。低気圧による雨なら翌日は晴れ。



主虹と副虹

副虹は主虹の外側 51 度の方向にできる。主虹に比べて色は薄い。主虹と反対に外側が紫色で内側が赤色。



盆地の霧

夜間の放射冷却によって発生した放射霧。



はじめに

誰でも明日の天気は気になるものです。仕事や行動にさまざまな影響が出てくるからです。特に、外での仕事は天候に大きく左右されるだけに、夜にテレビなどの天気予報の確認を怠らない人も多いのではないかでしょうか。こんなとき、自分でも明日の天気を予想することができれば、さらに速やかな対応ができるはずです。

本書は、天気予報をよくチェックし忘れる人、あるいは自分が生活している地域の天気を予想したいという人を対象にしたもので、自分の力で、その日の天気や明日の天気を短時間に予想して、仕事や活動に生かせるように、通学や通勤の途中、あるいは家の合間などの10分間で、**観天望気**によって天気が予想できることを目指しています。

観天望気による天気予報は誰でもできる手軽な天気予報と思われがちなのですが、観天望気による天気予報のほうが、天気図を使つた天気予報よりはるかに難しいのです。自然は複雑で、刻々と変化を繰り返していて、そのような状況から天気の変化を示すシグナルを読み取るには、経験がどうしても必要になります。

そこで、本書は、その難しい観天望気を経験がなくてもできるように、10カ条の条文にまとめました。10カ条の条文には、条文の要点をまとめてありますから、それらを見ながら天気予報ができるようになっています。実際の天気予報では、この10カ条全てを使うわけではなく、そ

の時々に必要な条文を組み合わせながら行います。これによつて、誰でも観天望氣を利用して、天氣予報をすることができるようになります。コンピュータによる数値予報が一般的になつてゐる現在も、最後はこの観天望氣による天氣予報に頼らざるをえないのです。

本書が、天気に左右される仕事をしている人や天氣予報をよくチェックし忘れる人の生活や仕事に、少しでも役立つようであれば筆者にとつてこれほど幸せなことはありません。

筆者



第1章

暦の上の季節と実際の季節
とは違いますか



●暦の上の季節って何？

一つに立秋に詠まれた歌としてよく知られている歌があります。

「暦の上ではもう秋になりましたが、まだまだ暑い日が続きます。くれぐれも、ご自愛下さい。……」。残暑お見舞いの葉書でよく見掛ける一節です。この暦の上の秋とはどのような意味でしょうか。**二十四節気**

では立春から立夏までが春で、立夏から立秋までが夏、立秋から立冬までが秋、立冬から翌年の立春までが冬になります。現在の暦では立春は2月4日ごろ、立夏は5月5日ごろ、立秋は8月7日ごろ、立冬は11月7日ごろです。冒頭の「暦の上では秋になりましたが」は、もう二十四節気の「立秋を過ぎましたが」という意味です。立秋を過ぎたといつても8月は真夏の一番暑いころ、そこで冒頭に挙げたような一節になるのです。

今から1000年も前の平安時代は、一説によると

比較的温暖な時代であつたようです。そのころに編纂された古今和歌集には、当時の季節に対する見方や感じ方がわかるような歌がいくつあります。その中の

あききぬと めにはさやかに 見えねども
風のおとにぞ おどろかねぬる

藤原の敏行の朝臣（古今和歌集 秋上）

作者は、景色を見ても秋になつたことははつきりわからぬけれど、風の音から秋がきたことが感じられるといつています。景色がはつきり秋の装いをしていくなくても、微妙な風の変化から季節が変わりつつあることを感じていたのですね。

●二十四節気ってなんですか

二十四節気は今から3000年ほど前の中華人民共和国の時代に黄河流域で生まれたといわれています。このころに使われていた暦は月の満ち欠けをもとにつくられた太陰暦で、満月から次の満月になるまでにかかる日数（29・53日）を1カ月としたものでした。ところ

が1カ月の日数が29日と半日となつて端数になることから、29日の月（小の月）と30日の月（大の月）を交互に配置することで月の満ち欠けに合わせていました。1年が12カ月ですから、その半分の6カ月が29日の月で後の半分が30日の月になります。この曆の1年間は354日になり、太陽曆の365日よりも短くなってしまいます。3年もすれば1カ月も季節がずれてしまっています。このずれをなくすために、2つ3年に1回、閏月を設けて1年を13カ月とすることでも調整していました。このような閏月を設けた曆が太陰太陽曆といわれるもので、日本でも旧曆として長く使われていた曆です。しかし閏月をつくった太陰太陽曆でも、結局は季節のずれが起こり農業をするうえでは大変困ります。曆の日付が変わつても、それぞれの季節がわかるようなものがあれば農業をするのには大変都合がよいわけです。そこで考え出されたのがこの二十四節気だつたのです。

地球からの距離がそれぞれ異なる星も、地球から見ると一つの球形をしたドーム上にちりばめられているように見えます。私たちが星や太陽などの動きを考える

えるときには、この大きな球形をしたドーム上を星が動いていると考えるとわかりやすくなります。この球形をした仮想のドームを天球と呼んでいます。地球が太陽の周りを公転しているために、太陽は天球の決まつた位置、黄道を西から東へ規則正しく動いているように見えます。図1はそのときの様子をモデル的に示したもので、図の天の赤道は地球の赤道を天球にまで拡大したときの位置になります。黄道は地球の公転面を天球まで広げたものだと思えばわかりやすいでしょう。地球の地軸が公転面に対して傾いているので、天の赤道と黄道はこの地軸の傾きと同じく23・4度傾いていて、春分点（春分の日の太陽の位置）と秋分点（秋分の日の太陽の位置）の2カ所で交差しています。この太陽の動く道筋（黄道）の春分点を起点に、15度ごとにそのときの季節にあつた名前をつけたものが二十四節気なのです。太陽の位置によつて決められてるので毎年同じ節気には同じ季節がやってきて、曆による季節がずれても、この節気を目安にすることでの農業がやりやすくなつたのです。



第6章

10分でできる
観天望気10力条を
マスターしましよう



観天望氣で天気を予想していくための基本的な視点は6項目あります。

一つ目は、基本的に西の空から天気が変わってくることです。地球が西から東に自転しているから結果的にそうなるのですが、もし東から西に自転しておれば、天気は東から変わってくるでしょう。低気圧や移動性高気圧は西からやってきます。これらが近づくと西の空にいち早くその兆候が現れるのです。同じ低気圧でも熱帯低気圧や台風は、必ずしも西からとは限りませんが、一般的にはまず南から西日本に近づき、日本の近海で偏西風によつて東の方向へ進んでくることが多いのです。台風も西からやつてくると考えてよいです。梅雨前線は南から北上してきますが、前線上に発生する低気圧はやはり西から東へ移動してきます。西の空をよく観察することは観天望氣の基本です。そのため事前に地域の東西南北を確認しておく必要があります。東西南北の目印になるものがあらかじめ決めておけば方角がよくわかります。

二つ目は気温の変化を意識することです。気温は風と同じく天気を左右する基本的な要素の一つで、夏に

発生する局地的な大雨や熱中症、冬の降雪も気温の変化に関係しています。

三つ目は風の向きに敏感になることです。普段風向きなど気にもならないでしょうが、天気予報にはこの風向きの変化が重要になつてきます。低気圧の接近によって変化する風向きをとらえることで、低気圧の接近をいち早く予測することができます。風向計はどこにでもあるわけではありませんから、それ以外の身近なもので風向きが判断できるようにしておきましょう。また、風の強さも天気に影響しますから、身近なものからおおよその風速がわかるようにしておくと便利です。

四つ目は、どのような雲が出ているか確認することです。低気圧が西から接近してくる場合には、必ずその前触れの雲が現れます。その雲から低気圧の接近が予測できるのです。続いて雨や雪をもたらす雲が広がつてくるかどうかを見極めれば、より正確な予測につながります。そのためにも基本的な雲の特徴だけは知つておく必要があります。

五つ目は普段とは異なる気象現象が現れていないか

を確認することです。その現象から天気を予測できることもあるからです。

最後は生物の能力を利用することです。生物は天気が変わるなどの環境の変化を敏感にとらえて、変化に対応するための行動をいち早く示します。その能力を利用すれば天気予報ができるのです。

以上の6項目の基本的な視点を具体的に表したもののが「10分でできる観天望気10力条」ということになります。

第1条 まず西の空の様子を見よう

【要点】

- ・ 西の山に雲や霧がかかれば雨が近づいています
- ・ 西の空が暗く、山や建物が見えないときは、まもなく雨になるでしょう
- ・ 西の山がよく見えるときは晴れるでしょう

確認問題 1

問1 西の山に雲が、かかるのは、どのようなときですか。

- ① 高気圧が近づいているとき

まず天気予報は西の空を眺めることから始めて下さ

い。西の山に雲や霧がかかるようであれば雨が近いことを示しています。低気圧の東側では南から流れ込んだ暖かく湿った空気が、山の斜面で上昇流となつて雲が発生し、斜面で冷やされて霧が発生するからです。1000m程度の山に雲や霧がかかるようであれば、そこでは、もう雨が降り始めているかも知れません。すでに西の空が黒い雲でおおわれて、山も建物を見えないときには雨雲（乱層雲）がかかっていて雨は目前に迫っています。反対に「西の山が見えれば晴れ」という天気ことわざがあるように、西の山がよく見えるのは高気圧圏内に入つていて西から低気圧が接近していないときです。特に低気圧や移動性高気圧が交互に西から訪れる春や秋に、こうした傾向が強くなります。